

## はじめに

今年も人権作文集ができあがりしました。

この「はばたき」は、昭和五十二年に第一集を刊行して以来、今年度で第三十八集となります。これまでに掲載された作品は千九十三点で、今年度だけでも約三十六万人の児童生徒の応募がありました。長い年月にわたり、多くの方々の御協力の上にこの作文集があることを、あらためて感謝申し上げます。

この中には、児童生徒の豊かな感性を通して、日常生活のさまざまな差別や偏見に気づき、互いの人権を尊重するためにはどうしたらよいかを、深く考えることのできる作品が載せられています。前向きに力強く生きようとする子供たち一人一人の生き方と、心の琴線に触れるような体験が詰まっています。それは、私たちに感動と勇気、そして希望を与えてくれるものです。この人権作文が、学校や地域・家庭等で広く活用されることを願っています。

すばらしい作品を応募してくださった児童生徒の皆さん、御協力をいただいた保護者の方、御指導をいただいた学校の先生方、刊行にあたり御協力いただいた編集委員の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成二十七年一月

埼玉県教育局市町村支援部人権教育課長 長谷川 雄一

## 文集を読むみなさんへ

一 この文集には、次のようなことが書かれた作文をのせています。

1 「自分も、ほかの一人一人も、みんな大切ないのちをもった人間なのだ。」と考えている。

2 人間が人間を苦しめている「まちがい」に気づき、ゆるしてはならないと考えている。

3 まちがいを直すために、自分はどうしたらよいか、どんな学級や社会にしていいたらよいかを考え、行動しようとしている。

二 作文を読んで次のことを学びとり、自分の問題として考え友達と話し合ってみましょう。

1 作者が、自分となかまとの生活についてありのままくわしくみつめていること。

2 「へんだな。」「これでいいのだろうか。」「と思った点について、いろいろな立場からよく考え、自分の意

見をのべていること。

3 作者や文中に出てくる人の、どんなところがすばらしいか。また、どんなところが不十分なままになっているか。

三 この文集から学んだことをもとにして身の回りのことを見つめ、作文を書いてみましょう。

1 書くことを通して、ふだんぎもんに思っていたことをはっきりさせ、それについて自分の考えをたしかめる。

2 自分のまわりの人の考え方、生活のし方について気づいたことを、できるだけくわしく書く。

3 書いたことをもとに、「人間を大切にし、ともに生きていく力」をもった人間になるよう努力する。

もくじ

はじめに  
文集を読むみなさんへ

小学校の部

いいよ	小二	6
パパとママ大すき	小二	8
みんなありがとう	小二	10
わたしのお母さん	小二	12
びょう気でもみんなといっしょよに	小三	15
ゆう気のしるし	小三	18
すぐになかなおり	小三	20
ぼくのこせい	小四	22
大好きなお父さん	小四	24
耳が聞こえないつらさ	小四	26
助ける	小五	30
わたしの妹	小五	32
前を向いて	小六	34
たとえ小さくても	小六	38
小さな親切	小六	41
正しい判断を	小六	44

中学校の部

一枚の白い手紙	中一	48
未来への希望	中一	50
人と人との支え合い	中一	52
笑顔あふれる十一世紀	中二	54
心にゆとりを	中二	56
うわさ	中二	58
わたしの好きな妹の笑顔	中二	60
あいさつの輪	中三	63
そこは誰の席ですか	中三	66
同じ人間として	中三	68
SHURUははじめの一步	中三	70
優しさのピース	中三	72
障害のある弟	高一	76
「心」を育てる	高三	78
障害と共に生きる	高三	80
生きるって素晴らしい？	高三	82
自分を見つめて	高三	84
勇気をもって	高三	86

作品掲載者一覧  
編集委員一覧

90 89

掲載作品の中には、一般的には当事者を蔑視したり差別したりするような言葉が使われているものもありますが、作者の意図を尊重し、一部原文のまま掲載しています。

# 小学校の部



いいよ

小 二

五月のじゅぎょうさんかんの日、天気よほうで、雨がふつてかみなりがおちるかもしれないと言っていました。

学校からかえるころになると、やっぱり雨がふつてきました。わたしは、Aちゃんといっしょにいそいでかえろうとしていました。それは、かみなりがこわいし、二人ともかさをもっていません。なかつたからです。

はしっている、もう一人、いつもいっしょにかえっているBちゃんがかさをさしてあるいていました。それで、Bちゃんに、

「かさに入れてください。」  
と、おねがいしてみました。すると、Bちゃんが、  
「いいよ。」

と、やさしく言ってくれました。わたしたちは、Bちゃんのマンションまでかさに入れてもらって、三人でかえりました。Bちゃんとわかれたあと、わたしのいえにきました。Aち

やんのおかあさんがいえにいな  
いかもしれないので、わたしの  
いえでいっしょにまっっているこ  
とにしました。二人であそんで  
いるときに、さっきのできごと  
を思い出しました。三人でかさ  
に入ったら自分がぬれてしまう  
のに、それでもBちゃんは、  
「いいよ。」  
と、言ってくれたのです。Bち  
やんはやさしいなと思いました。  
そして、わたしもみんなにや  
さしくできるようにがんばろう  
とけっしんしました。

みんなにやさしくされると、

とってもうれしくなります。や  
さしくすると、わたしももつと  
うれしくなります。  
「いいよ。」  
って、やさしくできるようにし  
たいと思います。  
みんながやさしくしたり、や  
さしくされたりすると、みんな  
がしあわせになるとおもいま  
す。



# パパとママ大すき

小 二

わたしのパパとママは、ガーナ人です。でもわたしは、日本で生まれたので日本人です。はじめて学校にきたとき、みんなの顔はなんで白いんだろうと思いました。ほいくえんのももだちには言われたことはないのに、学校にきたら、「茶色おぼけ。」とか、「きもい。」

と言われました。ほかにも、「ふみきるってどういういみですか。」と聞いたら、「ええ、知らないの。」と、いじわるな言いかたをされました。そのときは、ひどいなと思いました。でもママには言えませんでした。どうしてかと言うと、ママにいつも「強くなりなさい。」と、言われているからです。一年生のころは、絵をかくとき、みんなの顔が、はだ色なのでわたしもはだ色にぬりたく



て、自分のこともはだ色にぬつ  
ていました。でも、二年生の遠  
足の絵は、自分の顔は、茶色な  
のにみんながはだ色だからっ  
て自分の顔をはだ色にするの  
は、おかしいと思いました。自  
分の本当の顔の色が、いいと思  
って茶色でぬりました。茶色で  
ぬって見たら、自分の本当の色  
でぬって、よかったと思いまし  
た。

パパとママと同じ茶色のは  
だは、わたしのはだの色です。



## みんなありがとう

小 二

ぼくは、生まれた時から左手と左足をあまりうまくうごかすことができません。ほかの子がふつうにできることができなかったり、時間がかかったりしてしまいます。

そのことで、つらい思いをしているお母さんとお父さんは、いつもぼくを心ばいしてくれています。月に一回びょういんやりハビリにつれて行ってく

れます。しごともしているのに、ぼくのことを思っていていつしようけんめいしてくれれます。

ぼくがようち園に入園した時は、友だちがいませんでした。体がうまくうごかせないことで、理由もないのに、いじわるをされました。ぼくは、なんでもかな、とかなしくなりました。

小学校に入学してからは、友だちがたくさんできました。みんなとても親切です。ぼくにやさしくしてくれれます。

この前も、うえ木ばちをはこぶ時、友だちが、

「もってあげるよ。」

と言って、はこんでくれました。  
ころんだ時には、ほけん室につ  
れて行ってくれます。休み時間  
には、いっしょに外で元気にあ  
そんでいます。

ぼくは、今、しあわせです。  
みんなが大すきです。ぼくは、  
みんなにたすけてもらってい  
ます。だからこれからは、一人  
でできることはがんばってい  
きたいと思います。  
「これからもよろしくね。」



## わたしのお母さん

小 二

わたしには、大すきなお母さんがいます。お母さんは、いつもえ顔で、わたしの話を聞いてくれたり、べん強を教えてくださいたりします。どんなそうだんにものつてくれるやさしいお母さんです。

そんなわたしのお母さんは、わたしが生まれる前から、毎日、車いすで生活をしてきました。なぜ、車いすで生活をしてきた

かと言うと、しごとに行くとき、交通じこにあつて、歩くことや立つことができなくなつてしまつたからです。足だけではなく、手も力が入らないし、あまりよくうごきません。それでも、わたしのお母さんは、毎日、いろいろなことにがんばつていきます。

たとえば、力の入らない手で、わたしのよごれたくつ下をきれいにあらつてくれます。家ぞくのために、おいしいりょうりも作つてくれます。お母さんが作つてくれたグラタンやから

あげは、とつてもおいしいです。そうじの時は、かた手で車いすをこぎながら、モップをかけたリ、たなをふいたりしています。パソコンをつかって本を書いたり、お母さんの体けんをたくさんの人に話したりするしごともしています。

そんなお母さんを見ていると、わたしも、しぜんに、お母さんみたいにがんばろうと思います。

今、わたしが一番がんばっていることは、かん字の書きとりと計算とお手つだいです。どれ

も、おぼえることがたくさんあるけれど、新しいことを自分でできるようにしていきたいと思っています。それはなぜかと言うと、わたしは、お母さんにもまけないくらい自しんのもてることをふやしていきたいからです。

今、わたしは、夕ごはんを作る時には、いつしよに玉ねぎのかわをむいたり、おさらをならべたりしています。家ぞくで出かけた時には、お母さんの車いすをおしています。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さんが

いない時には、おふろそうじを  
したり、お母さんの手がとどか  
ないものをとったりします。す  
ると、お母さんは、いつも、  
「ありがとう」

と言つて、とてもよろこんでく  
れます。わたしは、お母さんの  
そんなえ顔が大すきです。

今は、まだ、わたしよりも、  
車いすで生活しているお母さ  
んのほうが、上手にできること  
ばかりです。でも、少しずつ、  
お母さんを見ならつて、できる  
ことをふやしていききたいです。  
また、これからは、町でこまっ

ている人がいたら、声をかけて  
たすけたいです。そうしたら、  
お母さんと同じようにえ顔で  
よろこぶ人がたくさんになる  
と思うからです。そして、たく  
さんの人たちのえ顔であふれ  
る毎日になるようにしていき  
たいです。



## びょう気でも

### みんなといっしょに

小三

わたしは、心ぞうのびょう気をして生まれてきました。今でも、手じゅつのあとがのこっつています。わたしは、心ぞうのびょう気なので、じきゆう走はもちろん、少し走るだけですぐにつかれてしまいます。びょういんの先生からは、

「じきゆう走、プールでのとびこみなど、はげしいうんどうはき

んしです。」

と言われています。でも、わたしは、走ることが大すきなので、じきゆう走大会の本番の時は、いつも本気で走ってしまいます。

また、わたしは、なやみがあります。それは、あまり食べ物をたべすぎないようにと言われていることです。学校や自分の家でも食べすぎないように、食べ物へらすなどしています。学校でみんながおかわりをしていても、わたしは、おかわりをしないようにしています。心ぞうのびょう気は仕方ないけれど、すきな物をすきな

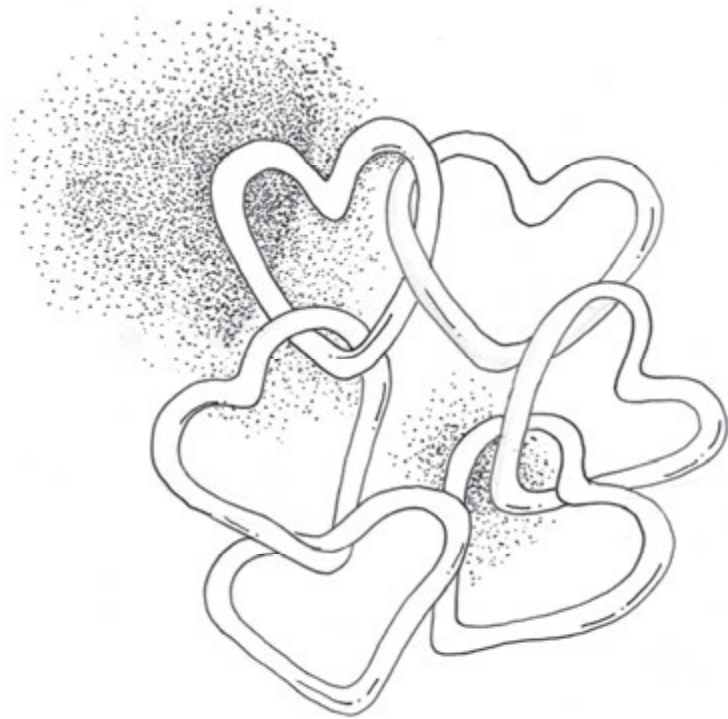
だけ食べたり、学校でみんなと同じようにおかわりをしたりしてみたいです。

生まれてから今まで、ずっと心ぞうのびよう気だったので、このびよう気がよくなるのか、いつなおるのかわかりません。でも、わたしは、友だちと同じように、体をつけてマラソンをしたり、みんなといっしょに思いつきり体を動かして遊んだりしてみたいです。このほかに、心ぞうのびよう気がなおったらいろいろいな事にしようせんしてみたいです。

世の中には、わたしと同じように心ぞうのびよう気でもつとたいへんな人や、そのほかのびよう気で苦しんでいる人がいます。わたしは、ふつうに自分の事は自分でできるし、ほとんどの事はみんなと同じようにできます。しかし、一人では自分の事ができなかつたり、みんなと同じ事ができなかつたりしてこまっている人たちがいいます。もし、わたしがそういう人たちに会うことがあったら、お手つだいをしてたすけたいです。こまっている人のお手つだいができるようなやさしい人に



なりたいと思います。そして、みんなのことをえ顔にしたいです。また、わたしも、心ぞうのびょう気をなおせるように、苦手な食べ物ものこさず食べたり、みんなといっしょに運動したりして、毎日元気でくらしていきたいと思います。



## ゆう気のしるし

小 三

ぼくの弟は、小さい時にやけどをしてしまいました。弟は、手じゅつをしないと命があぶなくなり、頭、うで、太もも、おなか、せなかの皮ふのいしよく手じゅつをしました。そして、体中があまりにもようになってしまいました。今考えると、その時、弟は、いたくて苦しくてとてもつらかったと思います。しかし、ぼくは、それを見てわらってしまいましたし

た。でも、お母さんが、「このあみもようは、やけどにたえたゆう気のしるしなんだよ。」

と教えてくれました。それまでは、あみもようはほかの人にはないものなのでおかしいと思っていました。でも、お母さんの言葉で、やけどにたえてがらんばった弟がかっこよく思えました。そして、そんな弟をぜったい守りたいと思いました。もし、弟のやけどのあとをわらう人がいたら、ぼくがゆう気のしるしだと教えます。いやなことを

言う人がいたら、やけどにたえた弟のかつこよさを教えます。ぼくがかならず、大人になるまで守りつづけたいです。

考え方や感じ方は、人によってさまざまですが、考え方や感じ方をかえるだけでよくなることがあります。

だから、ぼくは、見えているものがすべてではないと思います。悪いものやいやなものが、考え方の一つでよいものやすきなものになります。ぼくがおかしいと思っていたやけどのあとが、ゆう気のするしに思えたように、これから

は、弟以外にも、体がふ自由な人やしょうがいのある人に出会ったら、助けたいです。



## すぐになかなおり

小 三

わたしは、A君とけんかになった。A君は、わたしの足をふんだ。

そして、A君は、こう言った。

「なんだよ。」

わたしは、

「何もしてないよ。」

と言った。

「何かしたよ。」

と言われて、わたしは、むっとした。そして、しかえしをしてしまった。その時、BちゃんとC君

がけんかを止めてくれた。

一年生の時は、いつもみんなで遊んでいて、とってもなかなよしかった。二年生のころも、少しはけんかもした。あんなに楽しかったのに、今はけんかが多いなとわたしは思った。いろいろ考えていたら、とてもむねがどきどきした。

チャイムが鳴った。わたしはA君のことを見た。A君は、わたしをにらみ始めた。じゅ業が始まった。A君がにらんでいると考えることは、むねのおくにおいておこうとした。しかし、けんかのことを、わすれることはできなかつた。

わたしは、心の中で、なかなかお  
りをするこの考えがまとまっ  
た。A君、さつきはごめんねと、  
思った。

二時間目が終わった。A君のせ  
きに行った。わたしは、こう言っ  
た。

「A君、さつきは、たたいたりし  
てごめんね。」

すると、A君も

「ぼくも悪かった。本当にごめん  
ね。」

と言って、A君とわたしはなかな  
おりができた。そしたらBちゃん  
とC君もえ顔になった。

わたしは、こう思った。なかな  
おりっていいね。

そして、A君とわたしの二人も  
え顔になった。

え顔って、いいね。



## ぼくのこせい

小 四

ぼくには、きつ音があります。きつ音にもいろいろな種類があるのですが、ぼくは、言葉の最初がうまく話せません。つまってしまいます。小さいころは、言葉の教室に週に一回通っていました。別に、勉強をするわけではなく、先生とブロックや体を動かして遊んでいました。そのころは、周りの友だちもまだうまく話せず、ぼくのきつ音も目立ちませんでした。でも、中学年になり、友だちと少しずつ話し方がちがうのに気がつき始めてしまいました。ど

うして、みんなはすらすらと話せるのだろうと思ひ、みんなと同じようになりたくて、チャレンジしてみました。が、きんちようしてしまい、つまってしまいました。

クラスがえで、初めて同じクラスになった友だちに、

「なんで、あ、あ、あ、つて言うの？」

「おもしろい話し方だね。」

と言われてしまいました。答えたくなかったので、無視をするとは何回も聞かれました。ぼくは、とてもいやな気持ちになり、落ちこみました。しかし、ぼくの気持ちをうらぎるよきに、そうしたとき、きつ音はますます出てしまいます。もう、なんでほつといてくれない

のだろうと、やりきれない思いで  
いっぱいになりました。

でも、とてもうれしいこともあり  
ます。ぼくの周りには、きつ音を理  
かいしてくれ、やさしくしてくれる  
たくさんのお友だちがいます。その友  
だちは、ぼくと会話をする時、きつ  
音が出ても、ぼくの話が終わるのを  
待って聞いてくれます。決して、ぼ  
くはいやな気持ちになることはありません。  
最高のお友だちです。

最近、新しい学年になった時、  
しつ問していたお友だちも、少しづつ  
きつ音を気にせず、聞き流してく  
れるようになりました。

また、ぼくの事を一番理かいして  
くれているのはお母さんです。お母

さんは、

「きつ音は病気みたいなものだよ。

治らないかもしれないけど、治る  
かもしれない。だから、きつ音は  
あなたのせい。」

と言ってくれます。ぼくは、ぼくの  
ままでいいのだと、きつ音を受け止  
めることができます。

ぼくは、どうどうとしたいです。  
これからも、きつ音ともお友だちとも  
仲よく生活していきたいです。



## 大好きなお父さん

### 小 四

ぼくのお父さんは、生まれた時から耳が全く聞こえません。でも、お母さんと出会って結こんして、お姉ちゃんとおぼくが生まれました。

お父さんは、特別養老老人ホームで働いています。老人ホームには、耳が聞こえないお年よりがたくさんいます。お父さんは、そんなお年よりに、手話を使って、会話をしたり、身の回りの世話をしたりしています。ぼくは、お父さんが前にいたしせつの夏祭りに行ったことがあります。そのお祭りの会場では、耳が聞こえ

ない人には、分かりやすく手話を使ったり、字を書いたりしていました。その時、お父さんはずっと笑顔でした。それを見てぼくは、楽しそうだなと思いました。ぼくは、そんなお父さんがいきいきしているように見えました。

家族で出かけた時に、お店でごはんを食べていると、お父さんの知り合いの人と会うことがあります。お父さんは、手話で話していました。でも、ぼくには、その手話は速くて、話していることが分かりませんでした。でも、お父さんはその時にここにきて、ぼくやお姉ちゃんのことをしようかいしていました。それを見てぼくは、うれしいなと思いました。



ぼくは、そんなやさしいお父さんが大好きです。

お父さんは、最近はとてもいそがしくて、出ちようも前より多くなりました。それでも、ぼくはお父さんが大好きだから、心の中でいつもがんばって思っています。

お父さんのために、ぼくもお母さんやお姉ちゃんのように、手話を覚えて、お父さんと学校や習い事の話を作りたいです。

ぼくは、大きくなったら自分のゆめもあるけれど、お父さんを助けながら、耳が聞こえない人の役に立つものを作りたいです。



## 耳が聞こえないつらさ

### 小 四

「え、もう一回言つて。」

「また言うの。もういいよ。」

こんな会話で、相手にいやな思いをさせてしまうことが、何度もありました。

ぼくは、三才ごろから、耳があまり聞こえなくなつてしまつたのです。それは、中耳えんという病気にかかつてしまつたからです。

耳がよく聞こえないというのは、最悪です。それは、父や母、妹が言つている言葉が、一回では聞き取れず、何回も聞いてしまうからです。でも、

聞かれた方の気持ちを考えると、同じことをまた言うのなどと、思つてしまうでしょう。同じことを何回も聞かれるのは、相手の人にとって気持ちのいいことではないと思います。それに、自分の話をちゃんと聞いていないのかな、同じことを言わなくちやいけないなんて、めんどくさいなと、感じているのではないかと、心配になります。

家族でも、しつこく聞き返すと

「もういいよ。」

と言われることがあります。そう言われると、ぼくだつて、同じことを何度も聞くのはいやだ。めいわくだつて、わかっているのと、さげびたくなることがあります。

学校でも、耳がよく聞こえなくてこまることがあります。先生の話がよく聞き取れないことがあるのです。

先生は、

「一回しか言わないよ。」

と、おっしゃいます。だから、聞きもらさないように真げんに聞きます。一生けん命聞いていても、聞き取れないことがあるのです。

ぼくは、決して聞いていないのではなく、聞こえていないのです。友だちの話だって、いいかげんに聞いていたり、聞く気がなかったりするのではないのです。

先生は、

「目と耳と心を使って、人の話を聞きなさい。」

とも、おっしゃいます。ぼくは、目と耳と心を使って、人の話を聞いているのですが、耳だけが思うように働かないのです。話を聞き取ってくれないのです。そんな時、先生が黒板に話の内ようを書いてくれると、とても助かります。ありがたいなと思います。

ぼくは見た目だけでは、耳が聞こえにくいことがわからないと思います。ぼくと同じように世の中には、見た目だけではわからない、〇〇しにくい人がいると思います。先生から、内部しよう害という話も聞いたことがあります。見た目にはふつうの人と変わらないのですが、心ぞうやじんぞう、はいなどに、しよう害のある人がいます。こういう人のこ

とを内部しよう害というそうです。  
内部しよう害の人は、見た目にはつ  
らいことがわからないので、電車や  
バスのゆう先席などに座っていると、  
変な顔をされるそうです。こんな内  
部しよう害の人は、他の人に自分の  
つらさをわかってもらえず、どんな  
にかつらいことだと思えます。だか  
ら、見た目にはわからなくても、こ  
まったようすの人がいたり、みんな  
と同じようにできない人がいたりし  
たら、ぼくも、先生が黒板に話の内  
ようを書いてくれたようにしたいで  
す。

せん。  
「何かこまっていることはある  
の。」  
と、やさしく聞いて手助けをしたい  
です。  
〇〇しにくい人や内部しよう害の  
人は、見た目ではわからないけれど、  
自分ではどうしたらいいかわからず、  
こまっていることでしょう。そんな  
人に、やさしく声をかけてあげるこ  
とで、その人がどんなにか安心でき  
ると思います。  
どんな人でも、こまっている人に  
は声をかけ、どうしてほしいのかを  
聞いて助けられる、そんなやさしい  
人に、ぼくはなりたいと思います。



## 助ける

小 五

「うざい。」

「きもい。」

「バカ。」

この世の中には、人をきずつけるいろいろな言葉がある。しかし、みんながそれを知らず知らずのうちに使っている。だれもいじめとは思っていない。

わたしも、そんな経験を通して、二つの強い意志をもった。その経験をしたのは、わたしが四年生になつてA君と同じクラスになつた時だ。最初は、みんなきん張してあまり感

情を言葉に出さなかつた。しかし、一カ月くらいたつといろいろな人のいやな所を感じるようになり、自然と言葉にしていた。その中でも、A君は少しみんなに迷わくをかけたたり、人が見たくないことをしたりしていた。だからかもしれない。みんながA君にいやなことを言った。わたしもそのうちの一人だった。

「気持ち悪い。」

それをいじめではない、それくらい平気、きずつかない、とばかり思っていた。だから、やめなかつた。口にはしないけど聞いていただけの人にも、聞いているだけで止めなかつた。ある日、クラスで差別・いじめ・ぼう力など、人がきずつく事について

て話し合った。私はこの話合いで、  
今まで自分がどんなことをしたのか  
に気づいた。どうして気づかなかつ  
たのか、助けなかったのか。みんな  
にやめようと声をかけたり、A君に  
大じょうぶと、声をかけたりしてい  
れば、A君がどれだけ救われたか。

「ごめんね。」

クラスの全員がA君に言ったのは、  
初めてだったかもしれない。みんな  
が初めてA君の気持ちを分かろうと  
したしゆん間だった。

私が強い意志をもったのは、その  
時だった。一つ目は、相手の立場に  
なって考えるということ。二つ目は、  
人の心をきずつける言葉を言わない  
ということ。それは、私以外の人も

気をつけなければいけない。そんな  
ことは当たり前と思う時もある。で  
も、この思いを持てたのはA君、先  
生、そして、みんなのおかげだった。

これからこの経験を生かし、強  
い意志を持ち続けたい。そして、A  
君と同じ思いをする人がいなくなる  
ように、助けられる人になりたい。



## わたしの妹

小 五

わたしには、ふた子の妹がいます。妹は、発達しよう害があります。そのため、人の話す事は、だいたい理解できませんが、上手に話すことはできません。でも、見た目は普通の女の子です。

妹は、一年生から特別支えん学校に通っています。毎日少しずつ言葉を覚え、話すようになり、成長してきます。ふだんの生活の事は、毎日の学習でたくさん出来るようになりました。

わたしは、家族といっしょによく

買い物に行きます。その時、妹は思い通りにならないと、大声でおこつてしまいます。そうすると、一せいに他の人たちが私たちの方を見ます。中には、わざわざ近くに来て、こちらを見ながらこそこそと話をしていく人もいます。

私は、なんだかとってもはずかしく、悲しい気持ちになってしまいました。でも、母や父、祖母が、

「何がはずかしいの。何も悪いことなんかしてないのだから、ぜんぜんはずかしいことはないよ。」  
などと言ってくれたので、はずかさをわすれ、少し勇気も出てきました。

自分の気持ちを伝えられない妹が



かわいそうに思う事があります。わたしはずっと母のおなかの中にいる時から妹といっしょにいたので、妹の気持ちは何となくわかります。だから、妹がこまった時は、私が代わりに手伝いたいです。

わたしは妹が大好きです。特に、笑顔のかわいい妹が大好きです。妹はふ通の女の子、何もはずかしい事はないです。

母が、ノーマライゼーションとは、しょう害のある人が社会の中で他の人びとと同じように生活し、活動することが出来るようにする事、と教えてくれました。当たり前前の事です。が、妹たちしょう害のある人にとつては、とても大切な事だと思います。

た。

これからも、わたしたち家族はいろいろな所へ出かけ、たくさんのおこを体験し、いっしょに学んでいきたいです。

わたしは特別支えん学校のいろいろな行事に参加して、先生や、たくさんのおともたちの楽しそうな笑顔をたくさん見てきました。わたしも、しょう害のある子どもたちを一人でも多く笑顔にしたいです。だから、しょう来特別支えん学校の先生になって、しょう害のある子どもたちといっしょにがんばっていききたいです。



## 前を向いて

### 小 六

私は、小さいころから、耳が片方、聞こえません。あれ、なんでだろう、右耳が聞こえないと、びつくりし、母に話しました。

試しに母に何か言ってもらい、左耳をふさいで聞いてみました。それでもなぜか聞こえません。私は心配になったので、病院に行つて検査をしてもらいました。それでも、その病院では何も分からなかったので、紹介状を書いてもらい、総合病院に行つてきました。お医者さんは何か言っています。でも、私はまだ小さ

く、何を説明されているのかよく分からなかったので、母にたずねました。

「ねえ、お母さん、さっき何て言われたの。」

少し、自分でも心配していました。母に言われたことは、

「あのねえ、あなたは片方の耳が聞こえないのよ。」

母も、とまどいながら言っていました。でも、もつとおどろき、悲しくなつたのは私でした。あまりにも突然な事に言葉が出ませんでした。その日は、あまりにもびつくりして、悲しくて、大泣きしてしまいました。でも何日か経つてやつと、自分でその事実を受け止める事ができまし

た。

母は、

「お母さんも、全力で応えんするからね。だから、いろいろ大変かもしれないけれど、がんばってね。」  
と言ってくれました。私はもう事實は事実なんだから、自分の体とうまくつき合って生きていこう、と決心しました。

そして、保育園を卒業し、一年生、二年生、三年生と月日が経っていきましました。私はだんだんと高学年になっていくにつれ、片方の耳が聞こえない事に、不便を感じてきました。先生の話は普通に聞き取れるのですが、学校生活での休み時間、帰りの友達との会話など、友達の声を

聞き取れません。特に、ざわついている中や、右耳の方で話される時は、もう何を言われているのかさっぱり分かりません。自分の耳の片方が聞こえないという事は、少し悲しかったけれど、一年生、二年生、三年生のころまでは今ほど不便に感じた事はありませんでした。

今、私が一番不便に感じている事は、音がどこから聞こえてくるのかが分からない事です。時には、となりの班の子が、給食の時、私の名前を呼び、私が、きよろきよろしてると、その子たちが、  
「あいつっていつも、名前を呼ぶときよろきよろするんだぜ。」  
とからかって笑っていました。私は

自分に何か用があつて名前を呼ばれたんじゃない、試されたんだと分かるといかりと悲しみでいっぱいになりました。

どうせ、人に私の気持ちは分かるはずないと泣きそうになつたけれど、泣くといつそうばかにされると思い、ぐつとがまんしました。そして、私は母にその出来事を話しました。

母は、  
「そんな事言われたんだ・・・いやだったよね。お母さんもそんな事を言われたらあなたと同じ気持ちになるよ。でもね、そんな事に負けないくらい自分に実力をつけて、自分がこれだけは、だれにも負けないっていうものを作りなさい

い。それが自分の自信につながるから。がんばれ。」

と、言ってくれました。その時、私は、そんな事でなやむのだったら、自分に出来る事を増やそうと決心しました。それから、私はいつもいっしょにいる姉の字を見て、私もあんなにきれいな字を書きたい、そして妹のようなあんな上手な絵をかきたいと思ひ、二人を目標として出来る事をたくさん増やそうと、精いっぱいがんばってきました。今、思い返すとあんなにいやだった事があつて、それに対する母の一言が自分をここまで成長させてくれたのだと思ひました。

そう思うと、私は自分の周りには

こんなに支えてくれ、応えんしてく  
れる家族がいるのだから自分もがん  
ばらないと、という気持ちが生まれ  
ました。そして私はその時、将来は  
自分のような子を支えられる医者に  
なりたいたいと思いました。

これからも、いやな事があつたと  
してもそんな事に動じないで新たな  
目標に向かって、前を向いてがんば  
ろうと思います。



## たとえ小さくても

小 六

私は、よく小さいねとか、一年生の中に交じっていてもわからないねなどと、体が小さいことについていろいろと言われます。私にとってはとても傷つく言葉ですが、本当に小さいからそのようなことを言われても仕方がありません。それに、みんな意地悪で言っているのではないと思うからです。

私が、小学校に入ってからずっときらいだったことは発育測定です。みんなの前で私の低い身長を読み上げられます。だから、周りの人に聞

こえてしまうので身長をごまかすことができません。

五年生の発育測定日のことでした。みんなはたくさん伸びていると喜んでいたのに、家に帰って健康連らく票を見てみると、私の身長は前回の測定から、たった一ミリしか伸びていませんでした。私はそんな自分がくやしくて悲しくて、一人でこっそり泣きました。それから母に相談しました。すると母は、私の心がとても落ち着く言葉をかけてくれました。

「ママは、あなたが小さくても、大きくても同じくらい大好きよ。」

この言葉は私が大きくなっても決して忘れないと思います。なぜかという、私はこれからぐんぐん大き

くなるから安心してと言われても、  
どうしても安心できないからです。  
本当に背が伸びるかどうかは、だれ  
にもわからないと思います。母は私  
にこの言葉をかけてくれたので、た  
とえ私の体が小さくても、私のこと  
を大好きでいてくれるのだと気が付  
きました。本当に私の気持ちをわ  
かってくれていることを知って、と  
てもうれしくなりました。私が小さ  
いということを、気にしすぎていた  
のだと思いました。

このような気持ちは、逆に背が高  
い人でも同じではないでしょうか。  
背が高いと、すぐ地面に足がついて  
しまうので、うんていでは遊ばせ  
ん。小学生じゃないみたいとか、ラ

ンドセルが似合わないねなどと言わ  
れてしまうこともあるそうです。私  
は背の高い友達に、  
「小さくてかわいくていいな。」  
と言われたことがあります。私に  
とって背が高いのはうらやましいこ  
となので、なぜ小さいほうがいいの  
か不思議でした。

背が高くても、太っていてもやせ  
ていても、どんな体型の人にもそれ  
ぞれなやみがあるのだと思いました。  
だから体に関する傷つくような言葉  
は絶対に言わないようにします。自  
分が言わないだけでなく、もし、か  
らかわれて傷つき困っている友達が  
いたら、その友達が安心できるよう  
な言葉をかけられるようになりたい

です。そして、からかっている子には、  
「それって、言っているいい言葉なのかな。」  
と勇気を出して注意しようと思いません。  
また、私自身はどんなに小さいと言われても落ち込まずに、気にしないで過ごしていると思います。体は小さくても、心の広い人になりたいです。





## 小さな親切

### 小 六

みなさんは、親切を見つけたたり、されたり、だれかにしたりしたことはありませんか。親切な事をしてもらったらうれしいですよ。

私は、この前の週末、意外な場所で親切を見つけました。それは、山登りに行った時のことです。道中、細い道がたくさんありました。私が細い道を登っていくと、おじさんが待っていてくれました。私が、「こんにちは。ありがとうございます。います。」

と言ったら、なんだかうれしそうで

した。私もうれしくなりました。次の細い道は、おぼさんが通っていたので待っていると、「こんにちは。ありがとうございます。」と、笑顔で言ってくれました。小さな小さな親切が、人を笑顔に変えてくれました。

頂上に着いてベンチに座ると、目の前の柱に手紙がありました。私はなんて書いてあるのか気になり、その手紙を読んでみると、「ジャンパーを拾ってくれた方へ。○月×日に落としたジャンパーを拾って、届けてくださいまして、ご親切にありがとうございます。ありがとうございました。」

と書かれていました。ジャンパー

を拾った人はもちろん、手紙を書いた人も親切だと思いました。大切なジャンパーだったからこそ、拾ってくださった方にどうしてもお礼を伝えたくったのだと、私は思いました。山登りに来てよかったですと思いました。山の親切を知ることができたからです。山の神様は、山登りに来た人達に、小さくても親切は心が温かくなって、みんなが幸せになれるということを教えてくれたのではないでしょう。きっと、ジャンパーを拾った方も、手紙を読んで、心が温かくなつたと思います。

山での経験が忘れられず、私は、インターネットで調べてみました。

そうしたら、小さな親切運動という運動があることがわかりました。そこには、東日本大しん災発生後、ひ災地の一日も早い復興を願う応えんメッセーヂがたくさんありました。がんばれ、明日はくるよ、などの言葉がたくさんありました。

日本中の人達が、一日も早い復興を願っていることが感じられました。私が住んでいる日本は、元氣や勇氣をなくしてしまつた人々に温かい言葉をかけていて、私はうれしくなりました。

他のページを開いてみると、私の目にとまる言葉がありました。それは、あいさつは、相手を勇気づける、という言葉です。私は、今までのあ

いさつをふり返ってみました。

地域の方に会った時、あいさつをする、必ずあいさつが返ってきて、気持ちよく学校へ行けます。一方、高校生くらいの人にあいさつをして、あいさつが返ってこないと何だかいやな気持ちになります。あいさつは、人と人をつなぐ大切な言葉なので、人に会ったらあいさつをしていきます。

私は、たくさんの親切に気付きました。どれも人を喜ばせてくれる親切でした。ちよつとしたことでもいろいろな親切があり、いろいろな笑顔が生まれます。山登りでは、少しの心づかいが大切だということを学びました。

調べたことでは、日本が温かい国だということ、あいさつが大切だということ、気持ちを改めて感じました。ちよつとした心づかいが、こんなにうれしいことだということが分かりました。私は、これからも相手の気持ちを考えて、人のために働ける大人になりたいです。そんな夢に向かって、今、スタートを切ります。



## 正しい判断を

小 六

福島はもう住めない、安全には暮らせない。こんなありえないことがまん画になり、話題になっています。福島の放射線ひ害のことをえがいたこのまん画は、不安を招くと批判の声も上がっています。

私は、このまん画のことを聞いて、私が転校する時に感じた不安を思い出しました。私は、父が転勤になり、福島からA小学校に転校してきました。福島は、東日本大しん災によって引き起こされた原発事故のえいきようで、放射線量が高くなっています。そのた

め、私は、ホールボディカウンターによる内部ひばくの検査をしました。今まで気にもしていなかった放射線。その検査をするということ、自分の体の中に放射線が入っていたらどうしようかと、とても心配しました。幸いなことに、私には、問題がありませんでした。

しかし、福島といたら、放射線にお染されているというイメージを多くの人々が持っている聞いたことがありません。そんな福島に住む人は、放射線にまみれた人だと誤解されているかもしれませぬ。実際、福島からひ難した人に対し、放射能がうつるといいういじめが起こっていると母から聞いたことがありました。その

ため、埼玉に引っこして来たら、私も  
いじめられるかもしれないと不安で  
いっぱいでした。

さらに、転入したA小学校は、児童  
の人数がとても多く、前にいた学校よ  
りもとても大きな学校なので、この学  
校でやっていけるのだろうかと不安に  
なりました。二つの不安が重なって初  
めて学校に行った準備登校の時は、と  
てもきん張しました。

「いっしょに机を運ぼう。」  
きん張している私にA小学校の同級生  
たちが、明るく、元気に声をかけてく  
れました。私は、その一言を聞いて一  
気にきん張がとけました。きっと、不  
安でいっぱいできん張していたことに、  
みんなが気付いてくれたのでしよう。

だから明るく元気に声をかけてくれ  
たのだと思います。私は感謝の気持  
ちでいっぱいになりました。この気  
持ちを忘れずに、これからも友達と  
助け合って、過ごしていきたいです。

今、話題となっているこのまん画  
では、原発事故によって福島の人た  
ちは、鼻血やひ労感といったしよう  
状が出るとえがいています。一方で  
は、放射線との関連性はないという  
人もいるとニュースで聞きました。  
しかし、このまん画を読んで、福島  
に対して不安に感じた人も多いと思  
います。私もその気持ちは確かにそ  
うだなと思います。私も、検査をし  
た時、内部ひばくしていないかどう  
か心配でたまらなかつたからです。

相手を傷つける言葉を使つてはいけないと、担任の先生はよく話してくれ  
ます。その言葉によつて、相手はどう  
感じるか、しっかりと自分の頭でよく  
考えてから話さない、と教えていた  
だきました。だから、このまん画を読  
んだ人もありえない部分だけに注目す  
るのではなく、自分で何が正しいのか  
をよく考えて行動することがとても大  
切だと思ひます。

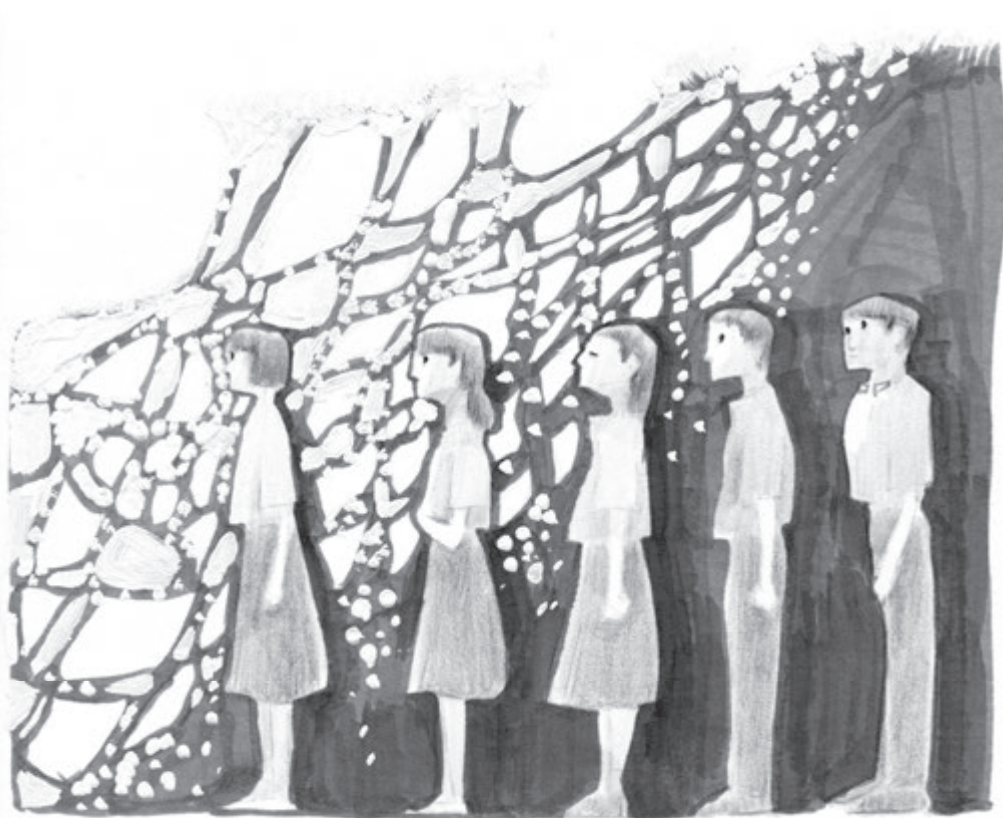
私の周りには、放射能がうつるなど  
といじめをする人はいません。むしろ、  
そんな不安をふき飛ばすかのように、  
明るく元気に声をかけてくれる人ばか  
りでした。だから、私は、多くの人が  
正しい判断をし、相手のことを考えら  
れることができるといいなと思ひます。

もし、このまん画を読んで福島の  
ことが不安になつた人がいたとした  
ら、ただ単に福島のことをこわがら  
ないでほしいです。その人なりの立  
場で構わないので、福島の人たちの  
不安をふき飛ばすような優しい思い  
やりのある態度をとつてほしいと思  
ひます。

私は、これからも、福島で生まれ  
育つたことをほこりに思ひながら、  
今、お世話になつてゐる家族や先生  
方、友達、地域の人たちを大切にし、  
周りに流されること  
なく、いつでも正しい  
判断ができる人間に  
なれるようにがんば  
りたいです。



# 中学校の部





## 一枚の白い手紙

中 一

「今日も学校が始まつちやうんだ……。」と思  
いながら下駄箱に入っている上ばきを取ろうと  
すると、一枚の白い手紙が落ちてきた。少しび  
くびくしながら手紙を見てみるとそこには「ゴ  
メンネ。」と書かれていた。その手紙を手に教室  
へ入った。手紙を書いてくれた人を探した。け  
れど、私に手紙を書いてくれるなんて、私には、  
誰一人思い当たる人がいなかった。

次の日は引き出しから。手紙には「あなたな  
らいじめに勝てる。」と書いてあった。次の日は  
ロッカーの中から。「助けられなくてゴメンネ。」  
と書かれていた。次の日も、その次の日も色々  
な所から白い手紙が見つかった。

その手紙に勇気をもらい、親と先生に言った。  
今までの悲しい気持ちを泣きながら必死に話し  
た。

学校では学級活動でイジメについてクラス皆

で話し合った。

家では毎日学校での出来事を話すようにした。  
それからイジメは無くなり、仲の良かった子  
ともずっと仲良くしようと約束した。

結局は白い手紙を書いてくれた人は分からな  
いままだった。

私に手紙を書いてくれた子に「ありがとう」  
と言いたい。そして、今イジメを受けている子  
達には、絶対に負けないと、思っていてほしい。

イジメは人の人生を変えるもの。

そして、イジメは多分永遠に無くならないと  
思う。でも、イジメを無くしたいと思う人が沢  
山いればイジメは必ず無くなると信じたい。

私はそう思う。

人と助け合って生きていくのが人だと思う。

人の痛みを知らなければ人を傷つける。

人の痛みを知っていれば人を傷つけない。

人の痛みを知った私は、これからどう人と接  
しながら前に進んで行けば良いのか。私は自分  
が絶対にしないようにしていきたいと強く思う。  
そして、イジメをしている人がいたら勇気を





もってやめようと、言いたい。私は人の気持ち  
を考え、自分が発した言葉や行動に一人一人が  
責任をもつ社会を築きたいと思う。

## 未来への希望

中 一

僕は双子だったので普通の赤ちゃんよりも小さく生まれてきました。呼吸が上手くできなかったので、気管切開という手術をしてチューブを入れて呼吸しています。生きるために声を失いました。だから筆談で皆と話します。

しゃべれないことはとても不便です。そして筆談は大変です。遠くにいる友達を呼べなかったり、別の部屋にいる家族に気づいてもらえなかったり、電話をかけることも出来ません。筆談で話したり、ファックスしたりすることはできません。急いでいると上手く書けないこともあります。また思いが伝わらなくて誤解させたり、迷惑をかけたりにしてしまいます。そんな時はとても悔しい気持ちになります。本当はおもしろいことを言って笑わせるなど、伝えたいことが沢山あります。上手く会話が出来るともっと仲間が増えるなど実感しています。

クラスの友達は小学校の頃から一緒なので僕のことを理解してくれます。中学校に入学して自己紹介する時、筆談帳に書いた僕の言葉を代わりに読んで発表してくれました。係や委員会も僕に出来る仕事をさせてくれました。いつも協力してくれて感謝しています。

また、僕は音楽が好きで、ピアノも弾けるので吹奏楽部に入部しました。けれど吹くことが出来ないでパーカッションやピアノの担当をさせてもらいました。先輩達も協力してくれて障害のある僕にも出来ることが増えました。沢山練習して早く演奏を覚えて最高の曲にしたいです。

障害がある僕にも出来ることがあるように、皆その人にしか出来ないことがあると思います。だから理解し合って不自由のない世の中になったら良いと思います。

小学校の時、アイマスク体験や車イスの体験をしました。僕は足が不自由だったので車イスの不便さは知っていました。目が不自由な体験は初めてでした。目が見えないことがこんな

に怖いとは思っていませんでした。健康な人も色々な体験をして、色々な障害がある人の気持ちや不便さを分かってくれると良いなと思います。

小学校の時、担任の先生が、一日僕と筆談で過ごしてくれました。

「気持ちが悪く伝わらないってとても辛いんだね。今まで良く頑張ってきたのね。」

と僕に言ってくれました。僕の気持ちを分かってもらえてとても嬉しく思いました。皆も一日話せないで筆談で過ごしていたら、きっと大変だということが分かると思います。また自分でも色々な体験をしたり、福祉ボランティアをしたりして体が不自由な人の気持ちを理解出来る人になりたいです。健康な人も年を取って体が不自由になる人もいます。新聞やテレビのニュースで、介護ヘルパーや看護師になる人が少ないと知りました。皆で障害がある人やお年寄りを支えられる世の中になって欲しいです。僕も色々な障害があるけれど、沢山福祉の体験や勉強をして、障害がある人やお年寄りを助け

られる人になりたいです。



## 人と人との支え合い

中 一

私が通っている学校では、一、二、三年生が一緒に困難なことにチャレンジしていくアドベンチャー教育という体験学習があります。私達は体験学習を行うために、神川げんきプラザに行きました。施設に着くと、校長先生が私達に、守って欲しい四つのことをお話になりました。一つ目は一生懸命、二つ目は楽しく、三つ目は安全に、四つ目は正直にでした。三つ目の安全には心の安全という意味でもありました。

さっそく私達は、一年、二年、三年でごちゃ混ぜになって二チーム作って体験を開始しました。たくさんの困難なことがありました。それを学年の違う皆と一緒に挑戦します。色々な困難をクリアしていくうちに、皆がどんどん一つになっていく感じがしました。色々な困難の中で私の心に残っていることが二つあります。

一つ目は、小さな板の上にチーム全員が一緒

に乗るということでした。何回も何回も挑戦しました。皆が皆、意見を出し合い、協力して取り組みました。誰かが意見を言っている時に、誰も勝手に話さず、意見を言っている人の話をきちんと聞いていました。その場に居て、皆が一つになっっているなと思いました。色々なやり方を試してみても、全ての作戦で皆が人のことを考え、支え合って挑戦してみたら成功しました。協力し合い、最後まであきらめずに挑戦し続けて成功したので、とても嬉しかったです。

二つ目はロープを使って反対側の板の上に全員で乗るという課題でした。これも何回か失敗しましたが、取り組んでいる時は皆が集中して、助け合っていました。私が失敗して最初からやり直しになった時も

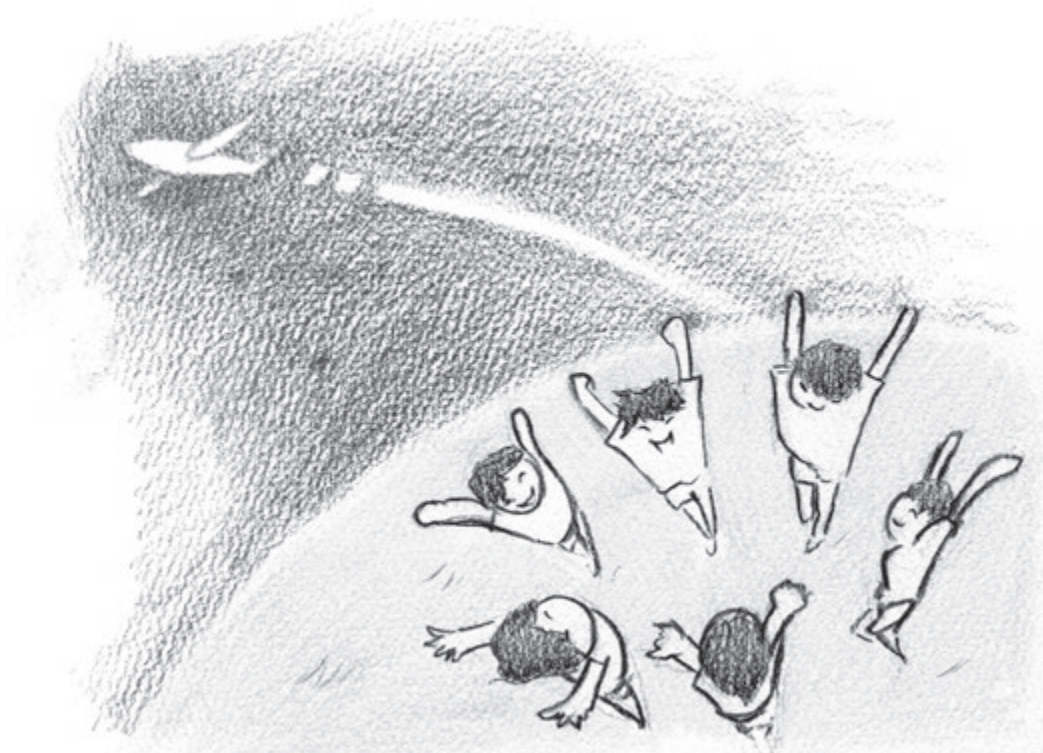
「大丈夫、大丈夫。」

と言われ、とても嬉しかったです。他にも失敗してやり直しになったりもしました。でも、誰も絶対にその人を責めたりはしませんでした。逆に、

「ドンマイ、大丈夫、大丈夫。」

という言葉をかけ合っていました。

この体験をして、最後まであきらめずに、協力して、一つになってとても嬉しかったです。こんなふうにと人と人が支え合っていたら、色々な人権に関する課題がなくなつて、素敵な世界になると思いました。





## 笑顔あふれる二十一世紀

中 一

私は、小学校四年生の時、学校の総合的な学習の時間の授業を利用して、近くにある特定施設養護盲老人ホームに行きました。当時、埼玉県に一つしかない施設であり、自分の家から近くでもあったことから、とてもわくわくしました。けれど、目の不自由な人がたくさんいると思うと緊張と不安でいっぱいになりました。

施設に着き、園長さんの話を聞きました。園長さんは、三歳の時にはしかにかかって失明したと話されていました。私の身の回りには、様々な色が存在しているのとショックを受けました。また、園長さんは、小さい頃から今に至るまで、数々の困難があり、とても苦労された方だとわかりました。目が不自由だからという理由で、周りの人からひどい扱いを受けたこともあったそうです。一体、その人達は、どんな思いで園長さんと接したのだろうかと考えると、ど

うして、なぜ、と思うばかりでした。

次に、目の不自由な方が文字を読むために大切な点字について学びました。点字は、六つのでこぼこを指の腹で、触れて読み取ります。私は、実際に点字の読み取りを体験しました。でも、何が打つてあるのか、全く分かりませんでした。しかし、園長さんは、すらすらとそれを読み取っていきました。この訪問を通して、私は思いました。障害のある人は、自分でできることは、自分でやりたいと望んでいるのではないかと。

障害のある人は、目が見えない、耳が聞こえないなど、大変なことがあると思います。しかし、得意なこと、できることをたくさんもっている、この訪問を通じて思いました。歌が上手な人、絵を描くのが得意な人、笑顔が素敵なお人など、みんながそれぞれ、輝きをもっていると思います。園長さんもたくさん苦労を知っているからこそ、今では、園長として活躍をさせているのです。これから、温かく見守る目と「苦手かな」、「大変かな」という時には、優し

く差し伸べる手で、全ての人達に接していきたく  
います。

人権とは、「全ての人々が生命と自由を確保さ  
れ、それぞれの幸福を追求する権利」あるいは、  
「人間が人間らしく生きる権利で、生まれなが  
らにもつ権利」のことだと思います。それらは、  
どんな人でも、みんなが平等にもっています。  
だから、誰かが苦しんで、それを見過ごすこと  
は、絶対にしません。この人権作文を書いたこ  
とで、私は、小学生の時の考え方から、さらに  
大切な思いへと変えることができました。人は、  
差別や人権侵害など、数々の過ちを犯してきま  
した。しかし、今は、二十一世紀。これからは、  
私達が先頭に立って、協力し合って、平和な世  
の中を創っていききたいです。そして、人々の笑  
顔があふれ、互いを思いやる力を誰もがもって  
いる、そんな素敵な二十一世紀になるように、  
自分から、その力を発信していききたいです。



## 心にゆとりを

中 二

母と買い物に行ったある日のこと。店内は沢山の人でにぎわい、レジには行列ができていた。どれ程の人が並んでいるのかさえわからない。これからその列に並び、待たなければいけないのかと思うと、私は少しいらいらした。母に車で待っていると言おうか、それとも我慢して一緒に待つか、店内を回っている間、ずっとそんなことを考えていた。だが、結局私は母に何も言えないまま、母とレジに並んでしまった。やはり、先が見えない。長い時間を感じる。今からでも母に車で待っているとのおうか。並んでいる間も、そんなことばかり考えていた。

その間、少しずつだがレジに近づいていた。ふと母を見ると、母は隣のレジを見つめていた。母の視線をたどると、そこには腰の曲がった小柄なおばあさんがいた。レジの列に並んでいるのか。だが、少し列から外れているように見え

る。どうしたんだらう。私はそのおばあさんから目が離せなくなっていた。そして、そのおばあさんが列に入れないでいることがわかった。皆、そこにおばあさんがいることがわかっていくはずだ。だが、誰もおばあさんを入れようとはしていない。中には、険しい顔をして、おばあさんにきつい言葉を投げかける人さえいた。誰か入れてあげて。私は心の中で叫んでいた。

その時だった。母の体が動いた。同時に、おばあさんが入れずにいたレジの列の女の人が声を出した。

「おばあちゃん、ここに入りな。」

女の人に向けられた周囲の視線は厳しかった。だが、女の方は気にもせず、自分の前におばあさんを入れた。私は自分の胸が熱くなっていることがわかった。私は、その女の人の優しさが嬉しかったのだ。そして、その後の母の行為が嬉しかった。

母は、カートに乗っていたおばあさんの買い物かごを、レジ台に乗せた。そして、その後もおばあさんを気遣い、おばあさんの手伝いをし



ていた。そんな母に、おばあさんを列に入れた女の方は、「ありがとうございました。」と声を掛けてくれた。母は、

「こちらこそ、入れてもらえて良かったと思います。ありがとうございました。」

と、安心した表情で言葉を返した。そして、帰りの車の中で母は、女の人のことを心にゆとりがある人だと話していた。

その言葉に私は、はっとした。なぜなら私は、自分がおばあさんをレジに入れなかった人達と同じかもしれないと、思ったからだ。私は、先が見えないレジにいらいらしながら並び、待っていたのだ。そんな私に対し、あの女の方は親切心に満ち、き然としていた。そして、母がおばあさんの為にした行為に対し、感謝の言葉を口にした。それも、ごく自然だった。

その日以来、私は少しだけ心にゆとりをもつて行動が出来るようになった気がする。今は、レジを待つ長い列を見ても、いらいらすることはない。それは、母とあの女の方が、私の心を動かしてくれたからだと思う。

心にゆとりがある人と母がそう言ったあのときの女の人に、私も一歩近づけたような気がする。



うわさ

中 二

私は、ある日友人からこんな話を聞きました。

「あの子、性格悪くてすごく嫌われているらし

いよ。」

私とその子はクラスは違いますが、何度か話したことがあります、とても優しい子でした。このうわさを聞いたときは、そうなのかなと思う程度でしたが、本人と一対一で話すとなると、あのうわさがひっかかってしまい、いつも通り話すことができないような気がしました。

そしてまた別の日、同じ友人は私に

「あの子、やっぱりクラスで嫌われているらしいよ。」

と言い、その子のクラスでの行動や発言などを聞かされました。私は、その子のことは嫌いではありませんでしたが、友人から、この嘘か本当か分からないうわさを聞いてなんとなく、あまり関わらないほうがいいかなと、思ってしま

いました。

それからなんとなく私はその子を避け始めました。もちろん無視したり、悪口を言ったわけではありません。その場の空気に流されて、なんとなく冷たくしてしまっただけです。それからその子はいつも通り話しかけてきましたが、私は素っ気ない態度をとってしまい、その子となかなかうまく話せなくなりました。きっと私は、自分が何かうわさされ、不特定多数の人に変なイメージをもたれるのが嫌だったのだと思います。

その後、その子とは自然とあまり話さなくなり、その子のことを気にかけることもなくなりました。私は、そのとき、人と人とのつながりは、けっこう簡単に終わってしまうのだなと思いました。そして、その子に自分から話しかけることはありませんでした。しかし、ある日、学校行事がきっかけでその子が話しかけてきました。なんとなく避けてしまっていた私に、いつもと同じ笑顔で話しかけてくれました。久しぶりに話せたうれしさと、今までその子を避け

てきた罪悪感で、微妙な気持ちでしたが、このことがきっかけで私たちは少しずつ話すようになりしました。最初は、他愛もない話をして笑い合っているだけでしたが、ある日その子から、「クラスの人に嘘のうわさを流されて困っている。」

と言われました。もちろん私はその話を知っていました。その子は、うわさに対して、

「私は何もしていないし、普通に学校に通っているだけ。自分の意志で生きていけば、周りに惑わされることもないし、周りのことが気になることもない。」

と言いました。私は、単純にその通りだなと思いい、彼女のことをがとてまかっこのいいと思いましたが。そして、あなたも気にしているなら大丈夫だと思ふよと、私のことまで気にかけてくれました。今、一番大変で悩んでいるのは、私ではなく彼女であり、私自身の弱さから、私が周りを気にしすぎてしまったのに、彼女は私を安心させてくれました。そして私は、これまでの行動を全て話し、謝りました。彼女は、

「気にしなくて大丈夫。無理もないし、それより今話せていることの方がうれしいから。」  
と言いました。私は、こんなことを言ってしまったら、もう前のように仲良くできないと思っていたので、彼女が前と変わりなく接してくれることが、とてもうれしかったです。

学校生活では、たくさんのうわさを聞きます。それでも、強い自分もち、誰にでも平等に接すれば、信じられる仲間もたくさんできると思います。私は、彼女から学んだ、強い自分や優しい心を大切に生きていきたいと思ひます。



## わたしの好きな妹の笑顔

中 二一

私には、三歳年下の妹がいます。妹とは、たまにけんかもしますが、にっこり笑う笑顔を見るとすぐに仲直りしたくなるほど、私は妹の笑顔が好きです。

妹は四歳の時に眼科で、右目が弱視と診断されました。弱視とは視力が弱い目のことをいいます。妹の左の目は視力がとてもよいため、左右のバランスが違いすぎ、見づらく、このまま大人になると生活するのも大変になってしまふと聞きました。妹を見ると、何かを見る時、顔全体を右に傾けていました。よく見える左の目で見るうちにくせになっていたので、階段を降りる時に手すりを持ち、時間をかけて降りていることを思い出しました。私は、

「遅いよ。早くしてよ。」

と、急かしたことがあります。見え方が違つて怖かったのかと思うと、気づいてあげられな

かった自分、優しく手を貸してあげられなかった自分が嫌になりました。そして、医師から、「もつと小さい時から治療をスタートしていれば……。」と聞いた母も後悔し、妹に隠れて泣いていました。

弱視の治療は、健全な目をアイパッチの大きなバンソウコウで隠し、弱視の目を使って訓練をする方法です。視力が弱すぎて危ないので、度の入った眼鏡を使用します。

すぐに妹は、片目の眼鏡での生活が始まりました。保育所に通う頃は、動きづらく疲れやすかったようですが、小学校に入学する頃には、だんだんと慣れてきたようでした。私は小学校四年生になり、心配していた通り、妹の姿に周囲の子たちはびっくりしていました。私が、周りの様子を気にしながら妹を見ると、妹は笑顔で手を振ってきました。しかし、手を挙げることはできませんでした。声を掛けることができずには帰ってしまったことを、今でも思い出します。

次の日から、妹はクラスの子たちから、

「気持ち悪い。」

「普通の眼鏡と違う。」

「変。」

と言われるようになりました。私は憤りを感じ、「やめて。私の妹をいじめないで。」

と、明日、みんなに言うことを妹に伝えましたが、

「大丈夫。目が良くなるためだから。」

と妹は笑って言いました。

けれども、妹に対する嫌がらせは続きませんでした。学校の机の上に妹のクーパーが全部折られていたり、物を捨てられたりすることもありました。妹は、帰ってくる母に抱きついて泣くことも多くなり、笑顔がだんだん見られなくなってきました。母が、

「眼鏡をしなくてもいい。」

と伝えましたが、妹は、

「する。負けない。目が良くなりたいたいから。」

と言いました。私は妹を見て涙が出ました。私の涙は、妹のことをかわいそうと思う涙ではありません。妹に対して頑張れと思う心が、じん

じんする強い涙だったことを今でもよく覚えています。

その後、学校の先生の指導で物がいたずらされることはなくなりましたが、言葉による嫌がらせは三年間続きました。妹は、

「目を治しているから。」

と、私が小学校を卒業した後も毎日言い続けました。そして、ついに学校で何も言われなくなりました。妹もよく笑うようになり、今では片目眼鏡をかけた笑顔も私は好きです。

妹が普通じゃないと、友達に言われた時、普通って何だろうと、考えました。誰が決めた普通なのか。一人一人に個性があつていいと私は思いました。いじめのことを、どこか他人事に思っていた私が、人権に初めてふれた瞬間でした。人権はみんながもっていて、守っていかなければならないものです。そして、人が幸せに生きていくのに必要な権利です。

暴力は体が傷つくけれど、言葉の暴力は心が傷つき、心の傷は簡単に治すことができません。人に見せることができないから、周囲の人にも

わかりません。自分でも気がつかないうちに、誰かを言葉で傷つけてしまうこともあるかもしれません。だから、私はいつも相手の気持ちを考えるように努力していこうと思います。

また、目の前の人が傷ついていたら、自分から声を掛け、優しく接することができる大人になりたいです。そして、誰からも頼られる存在になりたいです。

今まで、自分が変わりたいと思ったことはありませんでした。しかし、目標に向かっている今の自分が好きです。こうなれたのも、強い気持ちをもった笑顔のかわいい妹がいてくれたからです。





## あいさつの輪

中 三

あいさつは人と人をつなぐ言葉。この小さなつながりが、人々の大きな支えとなり、この町を守っていくものとなる。

「おはようございます。」

朝練習で学校に向かう通り道、私は毎朝近所に住んでいるおじいちゃんとあいさつをする。

「おはよう。」

笑顔で返してもらえると、今日もがんばろうと思える。毎朝家の周りの庭を手入れしているおじいちゃん。子どもが好きで、小学生の登校時も横断歩道に立って旗を揚げ、子ども達の安全を見守っている。あいさつの始まりは私の軽い会釈で、その時もおじいちゃんは笑顔で返してくれた。そしていつの間にか、それが日常になっている。

最近、高齢者の孤独死のニュースをよく耳にする。これは、外部との関わりをもたない一人暮らしの老人が増えているからではないだろうか。父

から聞いた話だが、私の家の近所でも高齢者の一人暮らしの方が、亡くなってから一カ月以上経って発見されたそう。亡くなって何日経っても誰にも気づかれなかった。私の身の回りでもそのようなことが起こってしまったのは、それだけ人付き合いが希薄で近隣との関わりが少ないからだと思う。また孤独死は寂しさからも引き起こされる。誰とも関わることもない毎日を過ごしていると、次第に孤独になり、自身の寿命さえも縮めてしまう。

さらに、認知症の患者が事件に巻き込まれるニュースもよく聞く。驚いたことに日本には認知症を発症して行方不明になっている人がおおよそ一万人いるそう。その中には家族に見つけられずに亡くなってしまいう人も少なからずいるという。一人で家を出て、帰り道がわからなくなってしまう人もいるそう。このような事件が増えていくのは、それだけ現代の地域社会の結びつきが弱まり、自分以外の人に関心をもたなくなっているからではないか。

私は、これらの問題を救うきっかけとしてあい

さつがあるのではないかと考えた。あいさつは大抵、目を見て向かい合っている。実際に相手の姿が見えるところである。おじいちゃんとは、平日は毎朝あいさつを交わしている。だから、もしおじいちゃんに会えなかったら、今日はどうしたのかなと気にするし、それが何日も続けば、何かあったのかと心配にもなる。あいさつを交わすことで、自然とその人への関心が深まる。あいさつを交わし合うことで、周りの人の温かい声も増えていくだろう。人は誰でも年をとっていく。年をとれば、やはり一人になってしまうお年寄りが多くなると思う。そんな時すぐに助けられるのは遠くの家族ではなく、地域の人たちだ。地域の中であいさつが増えれば、人とのつながりが増える。人とのつながりが増えるという事は、地域全体が助け合える存在になるということだ。

また私はこんなことも経験した。ある冬の日、私がまだ小学生だったときのことだ。学校帰り、いつものように家の鍵を開けようとしたが、鍵が見つからない。朝、鍵を持たずに出かけたことを思い出した。私の家は両親が共働きで、家に帰っ

てくるのは遅い。その日の北風は冷たかった。「どうしよう。」体が冷えて心も折れそうになった。そのとき隣の家のお母さんがちようど帰ってきた。玄関の前でランドセルを開いている私を不思議に思ったのか、すぐに

「どうしたの？」

と声をかけてくれた。鍵を忘れたことを力なく言う

「そっか。じゃあ、お母さんが帰ってくるまで家で待ってな。」

と、家にながらせてくれた。体が温かくなると同時に、心もホッと、不安が取りのぞかれた。隣の家のお母さんの優しさが心にしみた。私の家では隣の家とは家族ぐるみの付き合いができて、それも、きっかけはあいさつからなのだ。あいさつを通しての強いつながりがあったからこそ、あの時の私は救われたのではないかと思う。家族以外の誰かが気にかけてくれるというのは、何より心強いことではないだろうか。

人が生きていくうえで欠かせないこと、それは人と人とのつながりだと私は思う。お互いに声を



かけ合って助け合う、そんなつながりのある街をつくりたい。最初はほんの少しの勇気でいい。そうすれば少しずつ、大きな輪に近づいていく。あいさつを通して、この町が一つの家族となれるように。

今日も私は、いつものように朝練習に向かう。

「おはようございます。」

「おはよう。いってらっしゃい。」

新しい一日が始まった。



## そこは誰の席ですか

中 三

先日、私が電車に乗っていた時のことです。車内の席はほとんどうまっていましたが、私は目的の駅が遠かったため、空いている席を見つけて座りました。しばらくすると、一人のスーツ姿の男性が乗車しましたが、席がないので立っていました。私は最初、別にその人に席をゆずる必要はない、私は遠くの駅に行くから座っていていい、と思っていました。その後ずっと痛そうな顔で腰をさすその人を見て考えは変わりました。腰を痛めているその男性に席をゆずるべきだと思いました。しかし、私も最初そう感じたように、一見普通のサラリーマンです。お年寄りや妊婦さん、けがをしている人などに席をゆずるよりも、何倍も勇気がいると感じました。だから、声をかけずにさりげなく立ってみました。すると、その男性は席が空いたのを見て表情が明るくなりました。その様子を見ていた私は少し嬉しくなり、心の中で

「どうぞ。」と思いました。そしてその男性が一歩席に向かって歩いた時、驚いた顔をした後少しほほ笑み、元の場所に戻ってしまいました。不思議に思ってたっきの席を見ると、私が席を立った時に丁度乗車した、赤ちゃんを抱えている若い男性が走り込んで座っていました。私は良いことをしたはずなのに、何故かモヤモヤした気分になりました。そして、目的の駅に着くまで、向かい側でつらそうに立っている男性が視界から離れませんでした。

このような経験をして、そのことについて私は考えました。私が空けたあの席は、誰が座るべき席だったのだろうか。しかし、その答えは私には分かりませんでした。それは、誰が優先かの順位はつけられないし、つらい、苦しいといった感情の強さは、見ただけで判断することはできないからです。私の電車での経験で最初に乗車した、腰を痛めている男性もそうです。一見健康な人に見えるので、誰にも席をゆずってもらえませんでした。表情などをよく見ない限り、腰の痛みなんて気付きません。だからこそそういった人のためにも、

一人一人が周りをよく見ることが大切だと思いません。それは、自分のことだけでなく周りを気にかけることで、隠れた感情に少しでも気づくことができると思うからです。

優先席については、最近は電車やバスにベビーカー用のスペースがあったり、電車では優先席付近の床やつり皮の色が変えられたりと、しっかりとそのスペースがつくられています。今の車内では、それは必要であると思います。しかし、それがベストだとは思いません。最も良いのは、全席優先席であり、全席一般者の席であるという状態に車内がなることです。互いにゆずり合い、優先するべき人は誰かをお互いに考え、そのために周りを見る、ということが将来実現できるような考えることが必要だと思いません。

少し勇気を出せば交わせる会話、

「どうぞ。」

「ありがとう。」

これは一瞬のやりとりです。しかしこのたった一瞬がお互いの良い気持ちや温かい気持ちをつくり、そしてこの一瞬で思いやりや優しさが見えるのだ

と思います。そして、電車に乗っている人たちはそれぞれ他人同士かもしれないませんが、一人一人を同じ人間としてみれば、このゆずり合いの動作は誰でも自然にできることだと思いません。

電車に乗っただけで、さまざまな人の心のあり方や感覚が見えます。それは人それぞれ違うけれども、だからこそ周りを見ることが大事であり、その後に行動を起こす勇気というものが必要なのだと思います。また、それは電車などだけでなく、公共の場全てにおいて言えることだと私は思います。



## 同じ人間として

中 三

私には、二歳年上の兄がいる。兄は小学校の頃から体が不自由な子や障害のある子が入る学級に入っている。小さい頃、私と兄は、仲が良く、よく遊んでいた。けれど今は、兄は地元から離れた高校に通っており、部活をしているため家が出るのが早く、帰ってくるのも遅い。そのため、会話することがめっきり減ってしまった。

そんな兄は、小学校の頃、障害のある子供達に通う施設に通っていた。私は小さかったので一人で留守番をするわけにもいかず、私と兄と母の三人でよく行っていた。そこで、さまざまな障害のあるたくさんの人達に出会った。車いすに乗った人や上手にしゃべれない人が先生と一緒に勉強したり、遊んだりしていた。施設では、いくつかのグループに分かれて勉強などをするときもあったが、個別でやるときもあった。ある日、いつものように施設に行った。グループ活動を行っている

と、兄と同じ年で心に障害のある男の子と私より一つ年下の男の子とその妹の四人で、施設の外にある遊具で遊んだ。その妹は、障害はなく、明るく活発な子だった。その子と遊ぶのが施設に行く楽しみになった。正直、それまでは、私は施設に行くのが好きではなかった。みんな、どこかに障害があり、かわいそうだと思い、話すのに気を遣うので、面倒くさいと思っていた。その話をその子にすると、少し悲しい表情になった。しばらくしてその子はこのことを言った。しばらく

「じゃあ、自分の兄にも気を遣っているの。」

「別に、障害があっても兄であることに変わりはないでしょ。」

目が覚めた感じがした。何を気にしていたのだろう。障害のある人達や兄にまで、私は、自分との間に無意識に壁を作っていたのだと思った。

これ以降、私は、兄や障害のある人に対する考えが変わった。かわいそうとみていた視点を同じ人間として、たくさんの良い所をみつけるように変えた。施設に行く日が待ち遠しくなっていた。私達は、障害のある人を見ると、かつての私の

ように、かわいそうと思い、壁を作ってしまったことがある。これは、直接相手に何かをしたり、言ったりしているわけではないけれど、そのような考えが差別につながると思う。障害のある人であるとなかろうと、自分と違うという意識や特別扱いするのではなく、同じ人間として接するべきだと思う。現在、バリアフリーの世の中で、ノンステップバスなどの設備が整えられている中、私達の考えがまだまだ伴っていないと思う。まずは、同情という壁をなくし、一人の人間として、尊重することが大切である。



## S H U R U はじめの一步

中 三

みなさんは、外国人に道を聞かれた時にどうしますか。外国語が苦手だから……と逃げたり無視したりしていませんか。私は空港や街で外国の方に道を聞かれたら、必ず立ち止まって話を聞きまします。わかる時は英語かジェスチャーで答えます。わからなかったら近くにいる人と協力して教えようとしします。このように、ふだん日本人に道を聞かれた時と同じような対応をすると、たとえばまく道を説明できなくても、親切にしたいという気持ちには相手に伝わると思います。

こんなふうには私が思うのは、父を通して、日本に住む外国の方の苦勞を知っているからです。私の父はイラン人、母は日本人です。だから私も、みんなと顔立ちが少し違います。それにみんなの家とは、少しだけ文化も違います。父は日本に來てから二十年ほど経ちますが、初めて來日してから十年ほどは、街を歩くだけでジロジロ見られた

そうです。都会でも田舎でも、ただ歩いたり電車に乗ったりするだけで……。そして仕事でも、言葉が通じないことで差別されたことがあるそうです。うまくしゃべれないのは母国語ではないから当たり前のことなのに、悔しい思いをしたことが何回もあるといひます。

小学校低学年の頃、私も「自分の国に帰れ。」とか、「外人。」とからかわれたことがあります。仲間はずれにされたような、寂しい気持ちになりました。私が、というより父が差別されているように感じて、泣いたこともあります。

こんなふうには、自分と少し違うだけで相手を差別する人や、悪意はなくても道を聞かれて無視する人がいると、日本人の印象が悪くなるし、国際社会では日本人全体が信賴をなくしてしまひます。「どうして一部の日本人は外国人に対して差別するのだろうか？」と考へた時に、江戸幕府の鎖國の影響が今でも少し残っているのかな、と思ひます。それはまた、自分達より低い身分をつくることによつて、生活の不満をそらそうとしている身分制度の名残のようにもみえます。そしてこのままで



は、日本にやってきた観光客や日本に居住している外国人の居場所がどんどんなくなっていき、鎖国のような状態に逆戻りしてしまうと思います。

しかし、そんな中でも私の父は差別に負けずに、日本でたくさん友人をつくり、母と出会いました。大工をしてコツコツお金を貯めて、今はレストランを経営しています。父の店は食事とともにダンスショーを楽しめて、雑貨も売っています。お客さんはお店のペルシヤンな雰囲気を楽しんでくれます。個性的な文化をみんな楽しんで父の店には爽やかな風が吹いているようで、私も豊かな気持ちになります。

そして私には大きな夢があります。それは、自分の個性と背の高さを生かして、ベリーダンスのダンサーとして活躍することです。五歳でダンスを始め、父の店のショーからスタートして、今は国内の大きなショーに出演させていただき、中国で開催された国際大会で準優勝しました。ダンスという表現を使うと、言葉が通じなくても全世界に思いを伝えられます。また、SNSを使って国内、国外のダンサーと交流し、友情を深めています。

す。今の私は、父母から受け継いだ二つの文化の良いところを生かして自分の可能性を広げているので、毎日の生活がとても充実しています。

私が二十歳になった頃、東京オリンピックが開催されます。安全で清潔な街として世界的に評価の高い東京、そして日本です。ここに真のおもてなしの心が加わると、外国人にとってだけでなく日本人にとっても、さらに住みやすくなると思います。

肌の色が違う。言語が違う。国ごとに文化も違う……。違うものや違うことはたくさんあるけれど、同じ人間ということに変わりはありません。自分の国とは文化が違うという理由で偏見の目で見ても無視や差別をするのではなく、お互いの違いを認め合い、ともに楽しんでいきましょう。

それが、地球全体で人権を守り、争いをなくし、差別をゼロに近づけるためのSHURU（はじめの一步）だと思います。



## 優しさのピース

中 三

お年寄りの介護をする、この一つの仕事がどれほど大変で、勇気の灯をともしることがどれほど重要なことなのか、本当の意味で理解している人はほんの一握りしかないだろう。介護という言葉 を聞くと、誰もが「すごいね。」や「大変でしょう。何か困ったことがあったら手伝うよ。」という言葉 をかける。確かにその通りだし、励ましの言葉をかけることは悪いことではない。むしろ良いことだ。しかし実際はどうだろうか。本当に手伝えるのか。手伝うことの大変さを理解しているのか。手伝ってみて常に笑顔で接することは誰にでもできそうで、ほとんどの人ができない、と私は思う。こう考えるようになったのも私の祖父母がきっかけだった。

私には母方と父方の祖父母がいる。全員もう七十五歳を超えているが、近年までは驚くほど元気だった。大きな病氣も抱えていないし、車イスに

も無縁だ。それどころか自転車に乗って近くの図書館まで、本を借りに行ってくれたり、習い事の送迎をしてくれたりと、両親のように私たち姉弟を支えてくれた。私たち家族は、というとそれぞれが自分のことに精一杯で特に私は、祖父母にお礼を言ったことすらほとんどなかった。今になって分かるが、私は相当失礼な言葉を発していたと思う。しかし、それが自分の意識の中で当然となっていた。恐ろしさに自分自身気がつかなかった。そんな生活が、天と地が引つ繰り返ったように一変したのは今年の秋だった。

以前から、母方の祖父母は少し耳が遠くなっているな、と感じていた。会話をしても、「えっ」や「もう一回言つて。」という台詞が増えていたからだ。あえて何も言わなかったが、そろそろ年なのか、ということとは分かっていた。それが今年の秋になって特にひどくなったのだ。その上、祖父は認知症をも発症してしまった。祖父が患ったのは、アルツハイマー型認知症という最もかかる割合の大きい認知症だった。幸い症状はさほど重いわけではなく、歩行障害までは至っていない。し



かし記憶力の減退、視空間失認は介護に詳しくない私でも分かる。実際「散歩に行く。」と夕方に家を出たきり、真夜中になっても帰って来ず、結局警察に保護された。また、ショッピングセンターと一緒にいったときも、弟妹が祖父の手を引っ張ってくる

「あれえ？何だか知らない小学生に手を繋がれて来た気がするなあ。」

と言っていた。そんな状況下であったのに、本気で動いたのは娘である母だけだった。私はというと、祖父の症状、母の苦労は分かっていた……いや、そのつもりだった。でも何一つ知ろうとしていなかったし、動かなかった。今まで通り、自分という殻の中だけで生活していた。手伝うことの大変さを理解し、笑顔で接することができる人はほとんどいない。そう記したが、私もその一人だ。介護は必要なこと、誰かがやらなければいけないこと、頭ではそう分かっているつもりなのに行動はストップする。どうすれば良いか分からない、疲れる、耐えられない……。もちろん本気で介護と向き合って、心から楽しく思う人もいる。しか

し、決して肯定しているのではないが辛い現実から目を背け、逃げたくなくなるのが本来の心情だ。そう考えて介護を敬遠してしまう人は、私だけではないはずだ。

つい先日、祖父が

「こんなのは観るな。」

と言って、家族で観ていたバラエティー番組を消そうとした。私はついムツとした表情で、何か言つてよ、と母を見た。すると母は、

「大丈夫だよ、おじいちゃん。安心してね。」

と優しく声をかけた。その晩私は母にこう聞かれた。

「おじいちゃんのこと、どう思ってる？」

唐突な質問にとまどいつつも私は、

「別に。迷惑とまでは思っていないけど、認知症と分かっているだけでもムツとするんだよ。」

と答えた。すると母は、目に涙をためながら

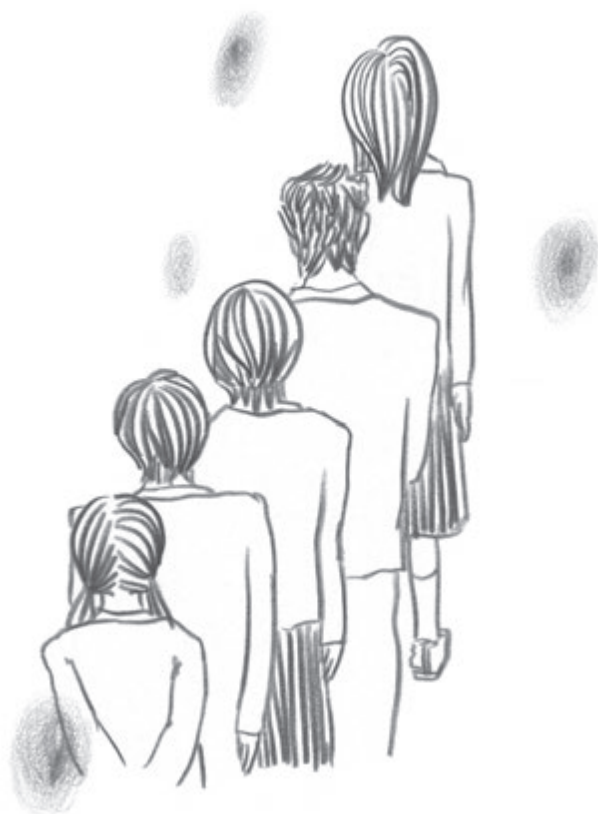
「あなたも小さい頃、お世話になったよね。今こそ手伝ってあげようよ。おじいちゃんだって、また来たか、みたいな空気の中で過ごすのは辛いし、苦しいんだよ。」

と言った。私は何も言えなかった。介護をするほうもされるほうも辛い。その中で人生に幕を下ろすことがどんなに苦しいか。どんなに寂しいか。私はそれをこれっぽっちも理解していなかった。

それから私はまだ、お茶をいれることや少し話しかけることしかできていない。介護というには程遠いだろう。しかし、その勇気のピースは無駄にはならない。絶対に。ちりも積もれば山となるということわざがあるように、小さな勇気と優しさのピースはいつかきつと大きなパズルとして完成する。それこそが、本当の意味での介護であり、お年寄りの方に対して私たちができる、最大の敬意だ、と私は思う。



# 高等学校 特別支援学校の部



## 障害のある弟

高一

みなさんの身近に、障害のある人はいますか。私の身近にはいます。私の弟です。弟は、今、特別支援学校の中学部の一年生です。自分で食事をしたり、言葉を話したり、一緒に買い物をする事ができません。学校では、専門に勉強した先生方が、学校での生活や、運動会・文化祭・サマースクールなどをサポートしてくれますが、家では、寝たい時に寝て、起きた時に起き、食べたい時に食べるという生活を送っています。母が仕事の時や学校帰りには、施設であずかってもらうこともありません。弟の通う特別支援学校の先生方や、施設の介助員さんには、とても感謝しています。しかし、祖母が弟の世話をしている時は、大声で泣いたり怒ったり、ひっかいたり、つねったり、時には物を壊したりしてしまうこともあります。中学一年生になると、力もとても強くなるので、私や祖母ではかかないません。特に、毎年春になる

と、泣いたり怒ったりする回数が増え、ひっかいたり、つねったりする行動が激しくなるので、とても怖く、世話が大変になることもありました。そんな弟ですが、最近では成長が少しずつ見えてきました。力も強くなっていますが、心も成長してきて、勝手な行動をしなくなりました。弟も成長しているのです。

私は、これから弟がさらにどう成長し、将来どんな生活を送るのか、また、いろいろなことができるようになるかとよいなあと、今ではとても楽しみに思うようになりました。弟の成長する姿は、私にも家族にも希望です。たいへんなこともたくさんありましたが、これからは、弟と一緒に成長していきたいです。

みなさんの中に、障害のある人に対して、偏見を持っている人もいると思います。世間の人の中には、障害の実情をよく知らないで、弟や家族を冷たい目で見る人もいます。しかし、少しでも障害のある人やその家族のことを理解し、温かく見守ってほしいと思います。



## 「心」を育てる

高三

知らないことを恐れ、自分からできるだけ遠ざけたいという感情は、誰しもが持っていると思います。それがだんだんと膨れ上がり、自分とは違うものと判断し、排除しようとする、それは差別へと向かっていきます。最近特に大きな問題となっている、スポーツの試合における人種差別的な言動も、このような無知や無関心によるものではないでしょうか。誰もが持つ、無意識の内に生まれた感情から、こんなにも簡単に差別が生じてしまう。では、差別や排除を世界からなくしていくために、私たちはどうしていけばよいのでしょうか。

蓄積されてきた自分の経験から何かしらの行動を起こしたとして、正しい行いにつながるかは人それぞれです。人の善悪に対する考えが一樣でない限り、同じ物事であっても、見る人によっては善にもなり、悪にもなる。こういった状況が生ま

れるのは、三者三様の人間社会の中では当然のことです。

ところで、あなたには自分の考えが周囲の意見から外れてしまった時に、言いようのない不安に駆られることがありますか。周りの顔色をうかがって、多数の意見に迎合することはありませんか。私もやはり、周囲の気持ちを推し量り、クラスの中で一人だけ逸脱した意見を言って、周囲からつまはじきにされたり無視されたりすることのないようにと、窮屈な気持ちになることがあります。このような気持ちは、小学校・中学校・高校と学校教育の中で自然と培われた感情なのかもしれません。「長いものに巻かれる」というような雰囲気、学校の中にあるからではないでしょうか。人間の経験や考え方・感じ方は、千差万別で十人十色であるはずです。そんな中で私たちはなぜ同じような意見にまとまっていかなくてはならないのか。誰かと違うということ、決して悪いことではないはずです。大勢の考えと違った意見を受け入れてもらえる環境があつたなら、自分の中にはない新しい考えや要素を持った人々と出会い、

更なる成長が望めると思います。

今、あちこちでグローバル化が唱えられています。世界中の人たちと交流し、コミュニケーションができる人材が求められています。そんな中で違いに寛容でない子どもたちが多いのでは、グローバル化の流れに逆行することになります。このままでは、近い将来、日本の存在価値が問われるような大きな問題になっていくのではないのでしょうか。そうならないために、「みんなと同じ」ということから外れてみる必要があるのではないのでしょうか。それが次世代を担う子どもたちの「心」を育てることだと、私は思います。

国際社会に生きる人間として、違いを受け入れる姿勢を持ちながら、各々が確固とした意見を持って善悪を判断し、自分の考えで行動する。そして個々の意見が尊重される環境が整ったとき、この国には素晴らしい人材が生まれていくと思います。





## 障害と共に生きる

高三

僕は幼稚園の頃に上手く歩くことができなくなりました。小学校低学年になると介助が必要となり、次第に車イスを利用することが多くなりました。それでも僕は楽観的でした。今は歩くことは大変だけどリハビリも頑張ってるからいずれ病気は良くなるだろうし、皆から「車イスかつこいいね。」とか言われて悪い気はしないし……。卒業までには歩けるようになって、体育で思いっきり走ればいいのか、と思っていました。

しかし小学校高学年になっても変わらない現状に、僕は気づいてしまったのです。もう立つことが出来ないのではないかと。僕は両親に質問してみました。それまであまり知らなかった、知ろうとしなかった自分の病気について、向き合えばならないと思ったからです。病気は進行性のもので、身体が徐々に動かしづらくなるというものでした。僕はその時、障害というものはつきり

意識したのだと思います。

そして、僕は小学校を卒業し一般の中学へ進みました。中学校は予想以上にハードで、家に帰っても授業中書ききれなかったノートの書きとりに追われ十分休むことができず、学校を休むことも増えました。友達も小学校時代からの親しい友達だけで、中学校では新たに作ることはできませんでした。

そうした生活を送るうちに卒業となり、選んだ高校は特別支援学校。一般の高校は、バリアフリーでなかったのも、中学より忙しくなる高校で単位をきちんととることが難しいということ諦めました。今まで一般校で中学まで来た僕がこの特別支援学校でやっていけるのだろうか。僕は不安も抱えつつ入学をしました。その不安は早々に消え去りました。ここでは僕のように障害を背負った生徒ばかりなので、もちろんバリアフリーで、授業の合間にしっかりと休む時間があったり、帰りの他の学校より早く、十分家で休息がとれたり……。そして一番驚いたのは特別支援学校に入ってから、学校を休む日が数えられる程度にまで減っ

たことです。

自分でもわかるくらいの変化に僕は、それだけ  
中学校時代は無理をしていたのだとわかりました。  
消極的だった中学校時代とは打って変わり積極的  
になることができ、何事にも挑戦するようになり  
ました。入学を機に環境も変わり、改めて自分を  
見つめ直すことができたことが大きいと思います。  
両親から病気のことを聞かされた時に受け入れた  
つもりでしたが、本当のところは今までできてい  
たことが次第にできなくなることが怖くて障害か  
ら目を背けていました。しかし、それでは状況は  
変わらない。障害と向き合うことで活路を見出す  
ことができます。やがてその活路は将来への道筋  
になっていくのではないのでしょうか。僕は障害が  
あるが故にできることは限られるかもしれませんが、  
これが故には逆にできることに集中して取り組  
もうという気持ちになりました。障害者、健常者  
を問わず、気持ちの持ち方で楽しい人生を送るこ  
とができるのではないかと思います。



生きるって素晴らしい？

高 三

私たち人間や動物、植物は、命を持ち、それぞれの時間を生きています。生まれること、それは、生きること。中には、病気やけがで、長く生きられない人がたくさんいます。その中で私たちは、人として生きています。

でも、私は今生きているのが精一杯です。

「ああ、もうだめなんだ。生きていたって。」  
と思う日が続きます。そういう自分がとても嫌いです。それと同時に、とても悲しくなり、涙を流す日もあります。生きたくても、生きられない人が世の中にはたくさんいるのにと思っても、そういった気持ちを抑えられず、時には自分に当たることもあります。とても辛い日々が続きます。生きていても辛いだけだと思ひ、それを他の人に話すと、

「絶対に終わりにしないで。」

「自分は楽になるかもしれないけれど、周りの人

たちが悲しむよ。」

と言われました。聞いた時には、

「あつ、そうか。生きなくちゃ。」

と思いますが、落ち込んだ時は、その言葉も忘れ、複雑な気持ちになります。しかし、ある日ニュースで、事故で亡くなった人がいると聞いた時、

「かわいそうに。」

と思うと同時に、

「自分は丈夫な体なんだ。よし、生きよう。」

と思ひました。この前向きな気持ちが、いつまで続くかわからず、怖くなります。でも、少しでもこの前向きな気持ちがあるのとないのでは、気持ちの持ち方も変わるので、少しでも続いて欲しいと思ひます。

私には、視覚障害があります。他の人よりもできることが限られてきます。その中で生まれたからには、精一杯生きることができたらと思ひます。そして、人に言われた瞬間だけ生きようと思ひるのではなく、心から生きるって素晴らしいと思ひる気持ちを持つてるようになりたいです。まだまだ辛く苦しい日々が続くと思ひます。涙を流しながら

自分に当たる日もあると思います。それでも、が  
んばって生きたいと思えます。今も、とても複雑  
な気持ちです。



## 自分を見つめて

高三

僕は将来小説家になりたいと考えている。そのため、コンクールに作品を出品しようとしている。僕の小説の書き方は、ふつうの人と違っていて、自分の考えたストーリーを、パソコンに接続したヘッドホンマイクに話しかけるという方法だ。こうすることで、言葉がパソコン内で文章化され、音声認識が不十分なところだけ訂正の打ち込みをして、小説が書き上げられていく。僕がこのような書き方をするのには理由がある。

それは、僕が思った方向に指を動かすことができず、介助者がいないとパソコンのキーボードを打つことが難しいからだ。次に、僕は漢字を書くことができない。漢字自体は、本と本の内容に合ったCDを読みながら聞くことで覚えられるが、漢字の筆記は文字の形がとらえにくく、縦と横の線が同じように見えたりするので、認識しづらいからだ。

思い返してみると、僕は小さい頃から文字を認識して書くことはできなかった。小学一年生で教科書をひらいても、ひらがなとカタカナをうまく区別することができず、漢字となると、さっぱりわからなかった。国語の「くじらぐも」では、先生の音読やCDを聞いて、内容はわかっているのに、読めないところがチラホラあった。

小学生のうちには、集中して音読を聞くことで文の内容を暗記していたが、中学生になると量が多くなったため、教科書に合うCDを購入して、家で聞くようになった。さらに、小遣いを貯めて、太宰治、中原中也や金子みすゞの本やCDを買って繰り返し聞いていた。すると、前後の内容から漢字の読みが推測できたり、読むことができたりするようになってきた。努力すれば苦手なことを克服できるとがわかったが、それでも漢字を書くことは難しいと感じる。

書きたい時に思うように書くことができないことが、ストレスになることもある。自分の考えたことを代筆者に伝えて筆記してもらおうときなどは、自分の想いや考えをうまく伝えられず、コミュニ

ケーションストレスが生まれてしまう。自分でも悔しいし、諦めの気持ちが強くなることもある。しかし、介助者がいることで、自分でできることも増えているので、適切な表現の仕方を更に検討していきたいと思う。

これから、小説家になるという夢の実現とともに、自分の力でいろいろなことにトライしていきたい。



## 勇気をもって

高三

この世界には、いじめというものがあります。それは、私が生まれる前からありました。私たち一人一人がなくすように努力し、いつかいじめのない世の中になりたいと願っています。

幼い頃は誰もが、いつも自分が正しくて、自分が一番だと思っています。だから、自分と考えが合わないから、わかってもらえないから、いじめてしまうのだと思っています。仕方ないとあきらめていました。きっかけは些細なことでした。いつも一人で本を読んでいる子に話しかけると、その子は笑顔で私の話を聞いてくれました。うれしくて、その子と何度も話をしました。しかし、ある日、仲の良かった子から、

「あの子と話しちゃだめ。」

といわれました。理由を聞くと、

「本ばかり読んでいて暗い。」

「嫌いだから。」

と返ってきました。そして、

「皆であの子を無視しよう。」

といわれました。私は首を横に振り、必死にやめさせようと思いました。しかし、あの子を無視しないと、私のことも無視する、と言われました。怖くてたまりませんでした。でも、私が無視したら、あの子はきっと笑顔を失ってしまう。次の日から友達があの子を無視し始めました。そして、それはいつの間にかクラス全体に広がり、クラスの皆がその子を見無視しました。その無視の輪が自分のところに来るかと思うと、怖くて身体が震えました。目を閉じて耳をふさいで、とうとう私は彼女と話すことをやめました。友達とはしゃぐ私を見ていた彼女の瞳は何を映していたのでしょうか。私の友達は、

「これはいじめじゃないよ。嫌いな子と話さないのは普通だよ。」

と言いました。これは本当にいじめではないのでしょうか。

もう一つ、知り合いから聞いた話があります。ある女の子がいじめられていて、それを先生が見



つけ、注意をしました。しかし、いじめていた子達は、

「これはいじめじゃない。」

と否定しました。その子達は、本人に聞こえないように悪口を言ったり、わざとぶつかったりしていたのにもかかわらず、

「こんなのでいじめと言われるなら、どんな些細なことでもいじめになる。」

と言ったのです。

「悪口なんてみんな言ってるし、本人に聞こえないればいい。ぶつかってもちゃんと謝ってる。」

いじめていた子達はそう主張しました。しかし、いじめをうけている子にはそれが苦痛でたまらなかつたのです。聞こえないと思っている悪口は、実際は本人の耳にも届いているし、ぶつかられても謝っているのは、いじめを受けている子のほうでした。

何がいじめで、どこからがいけないのか。友達には私に、無視はいじめではないと言いました。いじめている子は、本人に聞こえないように悪口を

言えばいいと言いました。しかしそれは間違っていると思うのです。聞こえない悪口、無視、いじめを見て見ぬふりをする、これはすべていじめです。自分が人にされて嫌なことは、いじめだと思っています。

私がいちばん許せないのは、「いじめを受けている人にも責任がある」と言う人です。いじめを受けている人は何も悪くありません。ただ人より少し優しく、心が綺麗なだけ。

そして、いじめを見て見ぬふりをする人たち。彼らの気持ちは痛いほどわかります。助けたいけど助けたら自分がいじめられる。自分の正義を貫けなくて動けずにいる、そんなことを誰もが思っているのではないのでしょうか。しかしほんのちよつとでもいい、勇気を出してほしいのです。その少しの勇気がたくさんの希望を生むと思うのです。

また、今も誰かを傷つけている人。あなたにはみんなをまとめる力がある。その力を自分だけではなく、人のために、優しい力として使って欲しいのです。そして、知って欲しい。今、傷つけて

はずだから。

いるその人の痛みを、自分の心の弱さを。あなたにとって目障りかもしれない。でもその人は懸命に生きています。不器用でも必死にもがいて、前を向いて。心を開いて、手を伸ばしてください。わかりあえる心があることを忘れないで。

そして、誰かに相談できずに苦しんでいる人。相談したら、いじめがひどくなるかもしれないと誰にも相談せず、悩んでいる人。怖いかもしれないけど、誰かに相談してみてください。気持ちをおわかってくれる人がいるはずですよ。

あの日の私になかった強さと勇気。何をされても屈しない強さと、やめなよと言う勇気。もし、あの時の私をもっと強い人だったら、あの子の笑顔を守れたかも知れません。

今の私が言えること。どうか勇気をもってほしい。自分の正義を貫く勇気を、自分の弱さを知って手を伸ばす勇気を、怖がらないで誰かに相談する勇気を。

わかりあえる心を持っているみんなへ。誰よりも強いあなたへ。心優しい君へ。怖がらないで勇気をもってほしい。その勇気は、笑顔の鍵になる



# 作品掲載者一覧

(五十首順)

## 小学校の部

畔本 湊斗	蔵市立北小学校
アパウ ダニエラ チエレマ	所沢市立並木小学校
大川 夏楓	朝霞市立朝霞第五小学校
大須賀 晴士	三郷市立立花小学校
掛川 紗希	川口市立里小学校
川淵 蒼生	北本市立南小学校
佐藤 亜弥奈	秩父市立荒川東小学校
志田 南	久喜市立久喜小学校
高橋 優人	熊谷市立市田小学校
永井 達希	坂戸市立城山小学校
西海 菜帆	入間市立高倉小学校
萩原 帆香	寄居町立鉢形小学校
原 弥生	戸田市立戸田第一小学校
深堀 えりか	長瀨町立長瀨第二小学校
福島 菜央	美里町立大沢小学校
又野 杏子	加須市立三俣小学校

## 中学校の部

荒井 美宇	本庄市立本庄西中学校
井口 理優	白岡市立篠津中学校
井関 明日香	和光市立大和中学校
門井 麗	行田市立行田中学校
川田 夏葵	桶川市立桶川東中学校
佐藤 星来	秩父市立高篠中学校
相馬 菜々美	小鹿野町立三田川中学校
中田 雅貴	小川町立櫛台中学校
松本 菜美	上尾市立瓦葺中学校
松本 みなみ	深谷市立藤沢中学校
望月 七海	川越市立高階中学校
吉田 瑠菜	春日部市立武里中学校

## 高等学校・特別支援学校の部

石井 里奈	県立小鹿野高等学校
梅木 聖哉	県立和光特別支援学校
神子 由妃	県立戸田翔陽高等学校
小林 真奈	県立児玉白楊高等学校
辻井 隼人	県立越谷特別支援学校
吉田 彩夏	県立特別支援学校塙保己一学園

「はばたき」第三十八集編集委員一覧

塚本あすか	表紙・挿絵	池田基	県立伊奈学園総合高等学校	教諭
		小川千代	坂戸市立入西小学校	教諭
		恩田工	東松山市立南中学校	教諭
		桑島敦	三郷市立北中学校	教諭
		佐藤恵子	寄居町立城南中学校	教諭
		清水澄江	北本市立石戸小学校	教諭
		西陽子	蓮田市立黒浜西小学校	教諭
		引間めぐみ	秩父市立荒川西小学校	教諭
		松本顕記	上里町立上里東小学校	教諭
		矢嶋由佳子	県立吉川美南高等学校	教諭
		和合秀昭	朝霞市立朝霞第一中学校	教諭

熊谷市立吉岡中学校

教諭

人権教育実践報告会発表作文集

「はばたき」第38集

編集 埼玉県教育委員会

発行 埼玉県教育局市町村支援部人権教育課

〒330-9301 さいたま市浦和区高砂 3-15-1

電話 048-830-6895

<http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/f2218/>